

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520526

研究課題名（和文） 多地点を結ぶ遠隔ビデオ会議サーバシステムを用いた異文化会議の文化的要因研究

研究課題名（英文） Cultural Factors Intervening in Videoconferencing: Their Effects and Consequences under the Use of a Remote Server System

研究代表者

三浦 香苗 (MIURA KANAE)

金沢大学・国際機構留学生センター・教授

研究者番号：50239175

研究成果の概要（和文）：

学生によるビデオ会議（日本語使用）を、タイ、トルコ、豪州の協定校と、1対1及び多地点同時通信で行った。その結果、①1対1の方が多地点より議論が円滑であった。②会議のturn数を日：豪、日：タイ、日：トルコで比較すると、日：豪が有意に多かった。③「結婚」「職業」などは異文化会議を進めやすいトピックである。④国によっては、サブトピックより更に下位の話題が活発に出た。以上の結果の原因が文化差か、グループの傾向か等は未だ特定できない。

研究成果の概要（英文）：

In this research, we organized and analyzed the Videoconferencing which was done in the Japanese language by the groups of university students in Japan, Thailand, Turkey and Australia. The outcomes of the research are summarized as follows:

- (1) Smoother discussions were observed in the videoconferences between two stations than among multi-stations.
- (2) The frequency of turn-taking was significantly higher in the Japan-Australia videoconference than the Japan-Thailand and Japan-Turkey videoconferences.
- (3) The discussion topics such as “Marriage” and “Job” were proven to be appropriate topics for the students’ cross-cultural discussions.
- (4) The discussions became active when students brought up new sub-topics by themselves. The types of new sub-topics differed depending on the groups.

The factors back-grounding the aforementioned outcomes of this research, whether they are cultural or group-specific, have not been clarified yet. They are the target of our future research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：ビデオ会議 遠隔教育 異文化理解 異文化コミュニケーション
ディスカッション 異文化ディスカッション 日本語教育 海外協定校

1. 研究開始当初の背景

平成19-20年度の研究「遠隔ディスカッションの有用性に関する実証的研究(平成19年度科研費基盤研究(C)研究課題番号19520450)」では、米国の協定校で日本語を学ぶ学生と本学の日本人学生の間で行う遠隔ビデオ会議(=videoconferencing, VCと略す)と直接対面会議(直接型と略す)を比較して、その違いを抽出した。VCは直接型に勝るものではないが、今後の異文化教育や言語教育において、VCは時間的経済的に非常に便利で、活用すべきものであることから、VCの効果を直接型にできる限り近づけるための方法を提案した。

本研究では、上記の成果を踏まえ、提案した方法を使い、グローバルな観点から、VCの相手国を米国のみに限らず、東南アジア、中東、オセアニアにまで広げ、異文化という要素がビデオ会議にどう影響するかを明らかにすることにより、将来のVCを用いた教育及び実践研究のために貢献したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、海外協定校学生と本学日本人学生間の遠隔異文化ディスカッション(ビデオ会議=VC)に、異文化という要素がどのように作用するかを解明し、教育のグローバル化に資するビデオ会議指導方法論を充実させることを目的とする。

3. 研究の方法

遠隔異文化ディスカッション(ビデオ会議=VC)を、タイ、トルコ、豪州の海外協定校と、1対1、及び多地点同時通信で行った。まず1対1と多地点という方法の影響を調べ、その上で、異文化という要素がVCにどう作用するかを明らかにしようと考えた。以下に具

体的に記す。

(1) VCの相手校、回数、2地点か3地点か

タイのチェンマイ大学、トルコのチャナッカレ・オンセキズマルト大学(=チャナッカレ大学)、オーストラリア国立大学(=ANU)、という文化的背景の大きく異なる国の学生と本学学生間でVCを計7回行い、そのうち、映像と音声の良い4回分を分析対象とした。その4回のうち、2地点会議は、日：豪州、日：タイ、日：トルコ、3地点会議は、日：タイ：トルコである。また、2地点会議と3地点会議の違いのみを抽出するために、日：日(2地点)と日：日：日(3地点)のVCを各1回行い、分析対象とした。

(2) VCの条件を整える

二つの変数(異文化、地点数)以外の条件を可能な限り均質に整えた。すなわち、会議のトピックは「結婚観」、人数は各地点で学部生男女各2人、計4人、会議時間は70分ないし80分程度、準備として同じ事前課題を学生に与えて、トピックとサブトピックについて考えるように誘導する。VC当日の時間配分は大まかな目安を与える。

使用言語は日本語、司会者は教師が指名した日本人学生が務め、司会者も議論に加わる。

(3) 参加学生数と学生の質

参加者は、海外協定校において日本語を主専攻ないし副専攻している日本語力上級レベルの学生と、日本人は本学の学部生で異文化に興味をもつ者とした。しかも毎回異なる学生に参加してもらった。1回につき1地点に男女各2名、全84名、延べ人数と異なり人数は同数である。これにより、参加者全員が初めてこの「結婚」トピックについてVC

で話合うことになり、話題に慣れてしまうという弊害が除かれた。

(4) VCのトピックとサブトピック

ディスカッションのトピックは、「どの社会／文化にも共通して存在するが、それぞれに国の事情、または個人の観念や感覚によって異なるもの」(深川・太田・三浦 2011, 深川・三浦 2010) から選び、「結婚観」とした。参加者全員が興味をもち、互いの社会・文化の多様な側面へと発展させることができるからである。

サブトピックは、教師が前もっていくつか選び、当日のディスカッションの流れを緩やかに作り例示したが、学生にはその流れ通りに話を進めなくてもよく、更に下位のトピックが出てきてもよいこと、自由に話してよいことを伝えた。

事前に選んだサブトピックは、「出会いのきっかけ」「結婚年齢」「結婚相手に求める条件」「結婚に対する考え」「結婚の形態」である。

(5) 事前・事後課題

本学のLMS (Learning Management System) 内の会議室機能を活用して、専用サイトを作り、学生に事前・事後の課題を与えて、サイトに提出させた。その他に自己紹介文を義務付けた。

事前課題は、「結婚」というトピックに関するサブトピックを5つ(上記)挙げて、それに関する自分の考えを書くことと、「結婚観」に関する資料を読み考えておくことである。資料は、国立青少年教育振興機構「これから親となる若者の就労観、結婚観、子育て観に関する調査研究」からとった「結婚する相手の条件」と「結婚に対する意識」調査の結果である。

事後課題は、VCに関する感想や意見を、アンケートに答える形で書くことである。VCを

通して相手の国についてわかったこと、自国についてわかったこと、VCの前後で「結婚観」について考えが変わったか、変わったことは何か、及び、自由記述である。続いて、VCへの満足の度合いとその理由を選択肢から選び、VCで得た有益なことなどを記述する。

(6) VC当日の手順

会議の進行は大雑把に「アイスブレイキング10-15分→トピックに関するディスカッション45-50分→まとめ10-15分」という構成に定め、使用言語は日本語、ビデオ会議当日は学生主導で、司会者は日本人学生として、教師はファシリテーターとして関与するに留めた。司会者は、教師から緩やかな議事進行の例は与えられるが、ディスカッションの成り行きに応じて臨機応変に議事を進める。

(7) 施設・ビデオ会議システム

ビデオ会議システムは、従来のビデオ会議専用機器の他に「ビデオ会議用サーバ及びクライアントシステム(=AVCON)」を新たに採用した。これは、中心となる地点(本学)にサーバを置き、他の地点ではクライアントソフトさえインストールすれば多地点を結ぶVCが可能になるシステムである。従来の高価なビデオ会議専用機器を各地点に備え付ける必要もなく、ビデオ会議専用室も不要で、スカイプより質が高く、インターネット帯域の狭い国・地域とも接続でき、映像と音声も通信可能な質が期待できる。タイのチェンマイ大学との接続は、従来のビデオ会議専用機器ではできなかった。また、トルコはビデオ会議専用機器をもつ会議室が別キャンパスにあった。そのため、タイ、トルコ、日本を結ぶ会議は、このAVCONシステムを使って実施した。豪州のキャンベラ市にあるオーストラリア国立大学とは、原因は不明であるがAVCONシステムでは接続できず、従来のビデオ会議専用機器を使う方法しかなかった。そのため、豪州

と他の外国を結ぶVCは実施できなかった。

VCに使用した部屋は、本学と豪州とタイはビデオ会議専用室、トルコは専用室でない教室であったが、問題はなかった。

(8) 技術者

本学には遠隔教育の技官職がないため、研究分担者である太田が技術を担当した。協定校では、タイには専門の技官がいたが、英語も日本語も解さないため、困難であった。トルコと豪州は教員が技術を担当した。

(9) 分析対象

分析は、会議の映像と音声データ、参加者へのアンケート結果、参加者の感想文、フォローアップインタビュー、教師による観察記録等を対象とした。

4. 研究成果

(1) 2地点と3地点のビデオ会議の違いを見出すために、異文化という要素を排除した日本人学生グループ同士のビデオ会議（日：日 と 日：日：日）を比較した。この二つのタイプの会議は、いずれも映像・音声共に非常に鮮明であった。会議の流れには大きな違いは見られなかったが、2地点の方が話のやり取りが頻繁で、話がはずんだ。その理由はまだ特定できていない。

(2) 海外協定校との3地点会議では、異なる三つの文化が交錯することにより、2地点会議よりも議論が活発化するかと期待したが、さほどの違いはなかった。この点について、遠隔会議という技術的な問題も含め、更に研究しなければならない。

(3) 異文化ディスカッションのトピックは大きく三つに分けることができ、その内の一つ「どの社会／文化にも共通して存在するが、それぞれに国の事情、または個人の観念や感覚によって異なるもの（例：教育、仕事・働き方、友達との付き合い方、恋愛・結婚観）」が我々の行っているような、異文化ディスカ

ッションを進めやすいトピックである。

(4) サブトピックによってディスカッションの長さや深まり方が異なったが、背景となる国の文化の違い、ビデオ会議構成員の個人やグループの傾向、司会の方法などが影響を与えている。文化のみが影響を与えていると結論することはできなかった。

(5) 手国によっては、サブトピックより更に下位の話題が自発的に多く出てきた。それが文化差なのか、参加グループの性質によるものなのか等は、特定できなかった。

(6) 参加者は自国の状況と自分の考えを活発に述べ合った。しかし、その背景（社会の仕組み、人々の考え等）にまで議論を深めることができなかった。異なる価値観への気づきを促すような仕組みが必要である。

(7) ディスカッションを単なる「異文化接触」から「異文化理解」に発展させるためには、より長い期間にわたり継続的に行うビデオ会議を企画し実施する必要がある。

(8) ビデオ会議の全ターン数を日：豪州、日：タイ、日：トルコで比較すると、日：豪州が有意に多かった。日：豪州 > 日：トルコ > 日：タイであった。原因は特定できないが、豪州の学生に特に活発に話す人がいたことも、一因かもしれない。

(9) ハード面では、ビデオ機器の仕様（ITU-T H.323）の確認、事前交信テスト、カメラとマイクの位置などが重要である。

(10) 参加者が見るモニター画面には、現在話している人物のクローズアップが必要であるが、その他に、各地点の全参加者の様子や表情が映し出された画面が不可欠である。それがあれば、ディスカッションの雰囲気はわかり、自分が話に割り込んでターンをとってもいいかどうかの判断が容易になる。このように「今話している人」と「参加者全体」をモニター画面に映し出すことができない場

合は、今話している人のクローズアップよりも、参加者全体が映された画面を見せる方が会議の進行がうまくいくようである。

(11) 会議の内容と進め方等に関与する指導教員の他に、ハード面の管理技術者を確保することが必須条件である。

(12) 今回の課題としては、以下のようなことがある。

異文化という要素がビデオ会議に与える影響を解明しようとしたが、明確な文化差は、これまでのところでは、なかなか特定できなかった。「文化」そして「異文化」の捉え方を根本から考えなければならないようである。今回の研究で良いデータを集めることはできたので、他の角度からの分析を試みたいと思う。

また、今回の一連の VC では、ある程度の深さの討論しかできなかったが、「より深い討論を促す仕掛け」は何かを探るために、様々な形態（会議の回数、活動形態、会議の進め方、教師の関わり方、事前課題などを変えて行う、等）による VC を実施し、最も成果の上がる形態を抽出したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

深川美帆・三浦香苗（2010）「異文化交流ディスカッションにおけるトピックについて－実践からの考察をもとに－」『金沢大学留学性センター紀要』第 13 号，査読無，pp. 23-43. URL:

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/jp/publications/pdf/Bulletin13.pdf>

〔学会発表〕（計 3 件）

① 2010 世界日本語教育研究大会（台北、台湾）口頭発表（2010 年 7 月 30 日）

三浦香苗・深川美帆・太田亨(2010)「ビデオ会議による異文化交流ディスカッションの実践－文化的背景の違いに着目して－」

●予稿集 CD-ROM248.

② 2011 世界日本語教育研究大会（天津、中国）口頭発表（2011 年 8 月 21 日）

深川美帆・太田亨・三浦香苗(2011)「ビデオ会議による異文化ディスカッション研究－トルコ人日本語学習者と日本人学生との実践から－」

●予稿集・論文集『異文化コミュニケーションのための日本語教育』Japanese Language Education for Cross Cultural Communication, pp.255-257.

③ 2012 年日本語教育国際研究大会（名古屋、日本）ポスター発表（2012 年 8 月 18 日）

三浦香苗・太田亨・深川美帆(2012)「ビデオ会議による異文化交流ディスカッションの方法論確立へ向けて」

●予稿集第一分冊 p.108.

〔図書〕（計 1 件）

三浦香苗ほか(2013) 研究成果報告書『多地点を結ぶ遠隔ビデオ会議サーバシステムを用いた異文化会議の文化的要因研究』全 55 ページ

〔その他〕

ホームページ等

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/kanaemi/>

異文化ディスカッション指導方法を解説する DVD を公開している。『TV 会議で行う「異文化ディスカッション」の方法』(DVD55 分 53 秒)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 香苗 (MIURA KANAE)

金沢大学・国際機構留学生センター・教授
研究者番号：50239175

(2) 研究分担者

太田 亨 (OHTA AKIRA)

金沢大学・国際機構留学生センター・教授
研究者番号：40303317

深川 美帆 (FUKAGAWA MIHO)

金沢大学・国際機構留学生センター・准教授
研究者番号：00583171